
海鳴に吹く風

二人で一人の仮面ライター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海鳴に吹く風

【Nコード】

N35380

【作者名】

二人で一人の仮面ライダー

【あらすじ】

転生したのはリリカルなのはの世界。

けど転生した二人はアニメに興味に無い二人。

そんな二人（後に三人？）は仮面ライダーとして戦う。

プロローグ

俺の名前は高木玲司

普通の社会人だったんだ

仕事がちよつと珍しかったけどな

探偵なんてやってたんだ

子供の頃から探偵に憧れてやっとなれたんだ

時々だが警察なんかも関わる事件なんかもやったんだぜ
拳銃の恐ろしさを知ったんだよな…

まあ警察にも親友が居たんだよ

浅田涼って奴だ

俺に警察じゃ動きにくい事件なんかを頼みにきてる

そんで俺が解決、もしくは情報を集めるみたいな感じだった

警察がそんな事していいのかって聞いた時は

「そんな事よりも事件を解決する方が大切だ」

って言ったんだ

警察辞めさせられそうな奴だったよ

で何でこんな自己紹介してるかっていうとだな…

「高木、これはどういうことだ？」

「うるせえ！俺だって訳わかんねえんだよ！」

「落ち着くのじゃ」

何故か真っ白な部屋で俺と浅田が居て、目の前に白い服着た爺さん

が居るからだ

「えーとじゃな、実はお主達は死んでしまったということなんじゃよ…」

……はあ？

「いや、実は死ぬはずじゃなかったんじゃがちと事故が起きてな。それでお主達は死んでしまったんじゃ」

死んだのか？

俺達は？

「おいおい、冗談にしては笑えねえぜ」

「…いや、確かに俺達は本当に死んだのかもしれないぞ」

「何？」

「とりあえずここに来る前を思い出せ高木」

えーと確か…

コイツと事件が終わったから飲みに行く事になって
そして帰り道にトラックが俺らに向かって突っ込んできて…

「ってマジで死んだのかあれで？」

あんなの何時もなら気づく筈だ
なのに何でだ？

「だからこちら側のミスなんじゃよ

その所為で死んだんじゃ」

「じゃあ何か、あんたは神様なのか？」

「そうじゃ」

おいおいマジでか

「今回はこちらのミスで死んでしまったからお主達にはもう一度生きる権利が与えられるんじゃ」

もう一度生きる権利？

生き返るのか？

「いや、あの世界では無く別の世界で生きてもらう
転生という事じゃ」

転生…

「その場合俺達の記憶はどうなるんだ？」

確かに浅田の言うとおりだ

記憶が無くなってもう一度生きることになるのか？

「いや記憶を持ったまま転生してもらう
あと転生する世界は少々危険な世界じゃ。お主達には力を与える」

そついうと神様の前に何かが出てくる

「これは？」

「ベルトじゃよ。仮面ライダーに変身する道具じゃ」

仮面ライダーだと？

「あの特撮のか」

「そうじゃ。これがあれば危険も少ないじゃろ」

そういうと浅田には赤い機械とUSBメモリを渡す

そして俺には三本のUSBメモリと黒い機械を二つ渡す
差込み口が二つあるのと一つだけのだ

「これが変身ベルトか」

「そうじゃ、だが高木玲司に渡したモノは二人揃わなければ変身できんのじゃ」

何だと？

「じゃ誰なんだもう一人は？」

「それは後に分かるじゃろ。使い方は転生と同時に知識を与える。
では達者での」

「「はあ？」」

その瞬間俺は意識を失った

プロローグ（後書き）

初めての執筆です

ミスなどは笑って教えてください

ストーリーはリリなのメインですが風都も出ます
けどまだまだ出ませんけどね…

Wも無印は出せないのです

第一話（前書き）

オリ設定出ます

具体的にはWの登場人物がリリなのキャラの家族とか

第一話

高木玲司改め左玲司だ

現在五歳になる

生まれてからは記憶は直ぐには無く、五歳の誕生日に思い出した。その後は普通の五歳児として過ごしているがやりにくいんだよ…

やっぱ一人浮くのな。浅田の行方は知らんが、その内会える気がする。このまま平和に探偵でも目指すかね

仮面ライダーにならなくても生きていけそうだ

そうそう、仮面ライダーについての知識はちゃんとあった

一般人には危なくて使えないのは当たり前だが使う気は殆ど無い。こんな平和なんだからな

怪人なんてでないだろうよ

けど後に俺は仮面ライダーの力が必要になるなんて思ってもいなかった

それは俺が十二歳の時に起きた

父さんと母さんとデパートに買い物に来ていた時だ

突然爆発が起きてあたりはパニックになった

俺はその時上から降ってくる瓦礫に気づかず犯人を捜していたんだ。子供にしては大人にも勝てる身体能力があったからな

その瞬間、俺は父さんと母さんに突き飛ばされた

俺の代わりに両親は瓦礫の中に消えた…

この世界に転生しても前世の両親は覚えてる
だから今の両親に変な接し方をするかもしれないと思ったがそんな
事無かった

当たり前のように家族として過ごせた

「父さん！母さん！」

助からないのは分かっていた
けどそれでも必死に瓦礫をどかした

涙が出てくる

周りから少し浮いていた自分にも優しくしてくれたのに
こんなことで死ぬなんて思いたくなかった

「何だ？生き残った奴がいるのか」

そんな声が聞こえた
後ろを振り向けばそこにいたのは怪人だった

「運が無いな、すぐに逃げれば良かったのにな」

そう言つて怪人は腕を振り上げる

「ッ！」

咄嗟に横に跳んだ

次の瞬間、俺がいた場所には炎の弾が飛んできて爆発した

「お前が犯人か！」

「そうだけど？」

「なんでこんな事をした！？」

「変な奴からコイツを貰った時は嘘かと思ったら
本当にこんな力が手に入るんだ。誰も俺には勝てないんだよ！
試しにここをぶっ壊してやったんだよ」

コイツ…！

今の俺にはドライバーは無い
使わないと思って家に置いてきたんだ

「じゃあな」

炎の弾が迫る

死ぬのを覚悟して目を瞑った

だが衝撃が来ない
目を開けるとそこには

「……」

骸骨の様な体に、白いソフト帽子
そして腰にあるロストドライバー
それは本当の…

「仮面ライダー……」

それが俺の探偵の師匠となる人
八神荘吉との出会いだった

第一話（後書き）

おやっさんは八神としてでます

亜樹子は出ません…

亜樹子のポジションにはやてかな

第二話（前書き）

三年ほど飛びます

第二話

俺の名前は左玲司。今日もこの町の平和を守るために戦うのさ……

「んな訳無いやろ！」

「イタツ！」

パコツと頭を叩かれる

「何すんだよはやて！？」

「いつもみたいに玲にいがアホな事やっとするからや」

俺をスリッパで叩いたのは八神はやて

俺達の妹みたいな奴だ

生意気だけどな

「はやて、それはそいつの病気の様なものだ。気にし過ぎるなよ」

「うるせえ、病気じゃねえよ！」

こいつは浅田涼、じゃ無くて照井涼だ

二年前にやっと会えたんだ

俺の親友だ

「それより、依頼は放っておいていいのか？」

依頼？

「ああ~~~~~!!、忘れてた!」

「依頼って猫探しの?、まだ終わってなかったんか?」

「そうだ、依頼人から催促の電話が来てるぞ」

「行ってくる!」

そう言って家を飛び出す

現在俺達は風都では無く海鳴で探偵をやっている

一年前からこっちはやての家でお世話になってるんだ

十五歳だがまあ実力はあるから問題無い…筈

実際はいつ警察にバレるか不安だ

けど探偵は辞めないけどな

「はあ、疲れた…」

「玲にいは猫探しだけは得意やからな」

「猫探しだけじゃねえよ！」

否定は出来ない

なんせここ最近の依頼は殆どが猫探しだからだ
猫飼ってる人多いな…

「それよりもう遅い、寝る時間だぞ」

意外と規則的な生活を心がけている照井だからな
厳しいぜ

「はい、おやすみな。玲にい、涼にい」

「おやすみ、はやて」

「おやすみ」

はやてを部屋に寝かせた後は俺達も自分の部屋に戻って寝る

けどその日変な夢を見た

助けてって言ってたような気がするんだが…？

「左、何か変な感じがしないか？」

次の日の夜にそんな事を照井が言った

「ああ、確かに変だ…」

町のどこかから何か感じる

「行くのか？」

「いや、今の俺よりお前の方が良い、はやてもいるから俺は残る」

「分かった」

そう言うと照井は家を出る

何も無ければいいが…

「何だアレは…」

異変を感じる場所へ行った俺の目の前では怪物に襲われている女の

子がいる

それにあれは何だ？

ドーパントとは違う感じだが…

「まずは助ける」

俺は手にエンジンブレードを持ち飛び出した

「はぁ！」

女の子の前に飛び出し、怪物を斬る

「えっ？」

女の子は混乱しているようだが仕方あるまい

「下がっている」

そう言って俺はアクセルドライバーを着ける

そしてガイアメモリを取り出し、スイッチを押す

『ACCEL！』

「変…身！」

そう叫び、ドライバーのスロットに差込みスロットルを捻る

『ACCEL！』

メモリの力が引き出され俺の体を包む

赤い装甲にフルフェイス・ヘルメットの様なマスク

俺は仮面ライダーアクセルへと変身した

「ええええええ！？」

地面に刺したエンジンブレードを引き抜く

「振り切るぜ」

そう言つて怪物を斬る

「ふっ、はぁ！」

相手はそれほど強くは無い
負ける事など有り得ん

「ガアアア！」

だが相手も負けじと攻撃してくるが…

「遅い！」

それを避けて斬る

ドーパント程では無いな

「止めだ」

エンジンブレードのスロットにメモリを差し込む

『ENGINE!』

「ガアアア!」

エンジンブレードのトリガーを引き、メモリの力を引き出す

『JET!』

「はあ!」

ブレードの切っ先からエネルギー弾が射出される

「ガアアア!?!」

こちらに向かってきた怪物に当たり、吹っ飛ぶ
だが

「グルウウウ…」

「何!」

まだ倒れんだと
マキシマムを使うか…

「退いてください!」

後ろから女の子の声が聞こえる

よく分かんが手が無い以上一旦下がるしかないか

「リリカル・マジカル！」

「封印すべきは忌まわしき器、ジュエルシード！」

「ジュエルシード、封印！」

そう叫ぶと光の帯が怪物に巻きつく

「グオオオオ！」

「リリカル・マジカル、ジュエルシード・シリアルXXI。封印！」

そうして怪物は段々と宝石の様な姿になる

アレが元凶か？

取り合えず変身を解く

「あ、あの…」

「ん？」

先ほどの怪物を倒した？らしい女の子だ

「ありがとうございました！」

助けたからかお礼を言われる
だが…

「礼を言うのはこつちだ。あれは俺だけでは倒せていなかっただろ
うしな」

あれは力尽くで倒してもまた復活するだろう

おそらくこの子はあれを倒す力があるみたいだしな
さっきの奴についても詳しく聞くようだな

「詳しく事情を聞きたいのだが…」

「あ、はい」

「その前にここを離れなくてはな」

「「え？」」

遠くの方から車の音が聞こえる

誰か異変に気づいた人が警察でも呼んだのだろう

「逃げるぞ」

「「は、はい！」」

帰りは遅くなるな

第二話（後書き）

一気に原作突入させてみた

照井君と左君はおやっさんに引き取られています
その辺りの話は番外として出そうと思います

第三話（前書き）

あまりなのは事覚えとらんなあ
見直さなくちゃ

第三話

「なるほど。魔法が実際に存在するとはな…」

ユーノというフェレットから聞いた話は信じられんような話だった魔法が存在する別な世界

ここは限りなく前世の地球と似ているが実際はかなり違うらしい
まあガイアメモリもあるのだし
魔法があってもあまり驚く事じゃない

左なら驚くだろうがな

「あの…」

「何だ？」

「あなたは何者ですか？、あの時の姿も魔法とは違うようですし」
魔法とは違うか
科学なのかコレは？

「正直俺にも詳しく分かんがあれは仮面ライダーと俺達は呼んでいる」

「仮面ライダー？」

「別な町ではこのガイアメモリという物が流通している」

そう言って俺はアクセルのメモリを見せる

「このガイアメモリは使用者を超人的な力を持つ怪人へと変化させる物だ。

ただし、多くの物が力に溺れて犯罪を犯す事が多い
そんな奴らを倒すのが俺達仮面ライダーだ」

こんなもの説明でいいだろう

「そんな物がこの世界にはあるんですか!？」

「ああ」

今回の原因であるジュエルシードの思念体と戦ったがあれよりもド
ーパントの方が強い

だが願いなどによって姿を変えるのは厄介だ
人が手に入れるのは不味い

なるべくこの町では戦いは起こしたくない
はやてがいるしな

「今回の事件解決まで俺が協力しよう」

「本当ですか!」

「ああ。この町に危険な物がばら撒かれているのだ。
町の平和の為に協力は惜しまん」

「すみません、ありがとうございます」

「今日はもう遅い。家まで送る」

「あ、はい」

今まであまり会話に混ざらなかった高町なのは声をかけるこの時間に一人にするのは危険だ

「道案内は頼んだぞ」

「分かりました」

「ありがとう、なのはを送ってくれて」

「いや、この時間にあの年頃の子が出歩いているのは危ないと思いましたから」

高町なのはを家まで送ってきたが…
父親と息子が警戒してるな

「では、家族を待たせてるので」

とりあえず早めに立ち去るのが良いだろう

「……魔法だと!？」

そんなものが存在するなんてな
驚いたぜ

俺も使いてえな

「今回の事件に協力する事になった。
もしかしたらはやてにも危険が及ぶかもしれないしな」

ロストログアか…

別な世界にもガイアメモリがあつたりするのかな？

「けど実際はお前の方が今は強いだろ？」

俺はまだ相棒が見つかって無いしな」

そう

俺は未だに神様から言われたもう一人を見つけていないのだ
だからダブルドライバーは使えない

何だか近くに居るような気がするんだがなあ…

だからといって俺が弱いわけじゃねえぞ！

今は照井が強いけどな

「ま、手が足りないときは手伝うぜ
殆どはお前が動いてくれよ」

「分かった。任せろ」

「んじゃ、俺ははやての世話でもしてるか」

気楽にやりたいけどねえ…

第三話（後書き）

この作品では仮面ライダーはかなり強い設定です
ガイアメモリは殆どは風都内でしか流通していません

Wに変身できるのはまだまだ先ですわ…

第四話

「なあなあ、最近涼兄ちゃん出かけるの多いで。帰ってくるのも遅いし」

やっぱ気になるよな
でも誤魔化しとかないと

「ああ、それはだなはやて。あいつに依頼が来てるんだよ」

「依頼？、それなら玲兄ちゃんがやるんじゃないの？」

「いや、今回はあいつを指名しての依頼だからな。俺はいいんだ。偶に手伝うことはあるかもしれないけどな」

「ふん。でもあんまり出かけない涼兄ちゃんに依頼がくるんやろな？」

「（ギクツ）いや、風都での知り合いとかだろ。だからこそあいつなんだろうよ」

「ほお。じゃ玲兄ちゃんは役立たずやん」

「い、いや違うぜ。今回は偶々あいつの知り合いが来たからであつて俺の方が依頼は多いからな。
あいつの方が優秀とかじゃねえぞ！」

「……」

「……」

「…まあ、一応納得しとくわ」

あぶねえゝ

コイツ変に鋭いからな
ばれるかと思っただぜ

まあ俺の誤魔化し方もなかなかだったからな

（兄ちゃん嘘つく時目がこっち向かん癖分かってんのかいな。ばれ
ばれやで）

「便利だな、魔法というものは…」

（そうですか？、僕は今まで普通に使ってたので…）

この念話というものは便利すぎるだろう

だがある程度は魔力が無いと出来ないらしいがな…

あと俺はランクで言うとAランクくらいあるらしい

「だがこの町であのような小さい物を探すのは時間が掛かるぞ」

（そうですね…、あ、あと口に出して喋らなくても大丈夫ですよ）

「そうなのか」

俺は今、ユーノと一緒に買い物しながらジュエルシード探索をしている

なのは（本人からそう呼んでいいと言われた）は学校だからな

（では後はなのはに説明でもしている。俺は買い物に集中する）

しっかりと新鮮な物を選ばんとな

はやてが良い料理を作る為だ

買い物が終わり、帰ろうとした時に魔力？を感じた

（ユーノ、これはまさか…）

（ジュエルシードが発動したんだ！、急がないと！）

この感じからして場所は…神社の方が

（先に行つてなのはと合流しておけ、ここからじゃ遠い）

（確かになのはの方が近いけど、どうやって？）

（こつする）

そう伝えて俺はユーノをしっかりと握る

（な、何を）

そして振りかぶって…投げる！

「ええ~~~~~！！!?？」

ユーノの叫びが聞こえるが無視だ
なのはに伝えなくては

（なのは、そちにユーノを投げた。大分近くの筈だ）

（ええ！、投げたって…）

（急げ！）

（は、はい！）

よし、俺も急いで行かなければな

神社に着いた俺が見たのは犬のような怪物となのは達だった
すこし遅かったか（十分早い）

ユーノはフラフラしているが大丈夫だろう

だがまだレイジングハートを起動させてはいないらしい
もたもたしてる内に相手は駆け出してくる

（間に合うか！）

俺はアクセルドライバーを身に着けて、メモリを取り出す

『ACCEL!』

「変…身…!」

ベルトのスロットを捻る

『ACCEL!』

響くガイアウイスパーと共に俺の姿が変わる

なのはの前に立ち、向かってくる怪物をブレードで斬る

「下がってろ、こいつの相手は俺がする!」

「え、でも…」

「封印は任せるからな」

そして相手に向かう

「はぁ!」

この前の敵とは強さが違うな
多少は強くなっている

「だが、この程度!」

この程度の敵などに負けん!

「はぁ!」

相手の動きを読み、攻撃を当てる

「グガアアア!」

それが止めになって相手は倒れる

「なのは、封印を」

「はい！」

魔法を使いジュエルシードを封印する

ジュエルシードに憑依されてたのは犬か

動物だから強い願いなどは無かったのか？

「とりあえず帰るぞ」

気絶していた女性は…一応起こしておいた

「殆どお前が戦ってたのか」

「ああ、幼い子に戦いなどさせたくないからな」

「まあな」

今日もジュエルシードを手に入れたらしい
けどまだ少なすぎる

そんな力があるなら他の魔法使いが狙うかもしれないし
そつしたらますます危険な事になる

「取り合えず俺の方でも探してみる。
もし発動したら倒すべきか？」

「ああ。だがなのはが着くまでは耐えている。
今の所封印が出来るのはあの子だけだ」

「分かった」

コイツが頑張ってくれば大丈夫だろうな

「じゃ、はやての為に言い訳考えとけよ。その内聞かれるかもしれないからな」

「何だと！」

「じゃおやすみ」

「待て、左！」

色々頑張ってくれ照井

第四話（後書き）

戦闘は苦手かもしれない

なのは未だにまともに戦ってないし

フェイトとは戦います

アクセルは強くてこの調子だとWが弱い感じになりそうで…

あとヒロインは左君だけは決まってます

照井君は…ハーレム作りそうかもしれません

第五話（前書き）

ぶっちゃけジョーカー出す為だけに書いた
それ以外の目的なしです

やはり課題は戦闘描写か…

第五話

「ありがとね、この子いつも居なくなっちゃって」

「これからは逃がさないよう気をつけてくださいよ」

「分かったわ」

「じゃあ、俺はこれで」

ありがとと手を振る女性に振り返えして帰る

今回はいつもどおりとなった猫探しである

毎回同じ人の猫が居なくなってる

そんなに嫌なのか…？

でもまあ依頼が来るだけマシか

そんな事を思っ歩いていると妙な違和感を感じた

「何だ？」

違和感の原因を探そうとするとあっさりと見つかった
青い宝石のような石だ

「あれか」

それを拾おうと近づくと石の傍に犬が居た
犬が石に触れると行き成り光を放つ

「うお！、何だ！？」

光が収まり犬を見るとそこには犬ではなくドーパントのような奴が居る

「グオオオオ！！」

やっべ

これがジュエルシードか！

取り合えず照井は気づいたと思うしここで食い止めなきゃな

俺はロストドライバーを取り出して身に着ける

ガイアメモリを取り出しスイッチを押す

『J O K E R！』

「変身！」

ガイアメモリをドライバーのスロットに差し込む
そしてスロットを外側に展開させる

『J O K E R！』

黒い装甲に赤い複眼

これが俺の変身した仮面ライダージョーカーだ

「いくぜ」

「ガアアア!!」

相手に向かって走り出しパンチを繰り返す

「はっ!」

「ガッ!?!」

隙だらけの相手にパンチ、キックを絶え間無く当てる

「ふっ!、はあ!」

ドーパントよりも弱いな
これ位負けるわけねえ!

「オラア!!」

「ガアア!?!」

最後に相手を吹き飛ばす

「これで決めるぜ」

ドライバーからメモリを抜き取り、横に付いているマキシマムスロットに差し込む

『JOKER! MAXIMUM DRIVE!』

「ライダーキック…」

ジョーカーメモリの力を最大まで引き出し右足にエネルギーを纏う
勢いをつける為に走り出して跳び蹴りを食らわせる

「おりゃあー!!」

「グガアアア!!」

まともに食らった怪物は倒れて動かなくなる

「おし、これ位だな」

マキシマムを食らわせたし暫くは動けないだろ
変身を解除した俺は照井に電話を掛ける

「照井、ジュエルシードみたいなのが怪物になった奴倒しといたぜ」

『本当か左、もう少しでなのは着く。そこから離れていろよ』

「りょーかい」

噂の魔法少女か
会ってみたいなあ

まあ、照井が関わってんだしいつかは会えるよな

さっさと帰らないとはやてに怒られるし
帰るか

「何処ほつつき歩いとんねん！、遅いで！」

「だから人助けだよ！、何度言ったら分かるんだよ！」

「嘘付くなや！、しょーじきに喋らんか！」

「イタッ！、てめスリッパで叩くなあ！！！！！」

「うるさい！！！」

「イタッ！」

第五話（後書き）

ジョーカーのライダーキックは素晴らしい
上手く表現できないのが残念です

Wより先にジョーカーを出すなんて…
Wまでの道は長いぜ

第六話（前書き）

なのはのセリフが少ない件

それは作者がなのはを苦手とするからである
至急改善しなければなりません

第六話

『照井、はやてがしつこい』

「頑張れ」

『てかこれお前の問題だろ！、お前で如何にかしろよ！』

「悪い、今忙しいからまた後でな」

『あ、てめまちやがっ』

ブチッと強制的に電話を終了させる

最近はやてがかなりしつこく俺の行動を探ってくる
左も誤魔化しきれなくなるくらいにな

…帰りたくないな

帰るのは危険だから俺は町を歩きながらジュエルシード探索だ

魔力を感じ、すぐに発動した場所へ向かおうとするが

「これは！」

発動した場所を中心に巨大な木が現れる
何をどうしたらこんなもになるんだ？

だがこれは他の人達にも被害が出る
早く止めなければ！

ドライバーを身に着け、メモリのスイッチを押す

『ACCEL！』

「変…身！」

『ACCEL！』

アクセルへと変身した俺はドライバーのバックル部分を外す

「はっ！」

体に変形して自らがバイクとなるバイクフォームとなる

急がなければな…

「これほどとは…」

ジュエルシードが発動した場所に行くとそこは根が張り巡らされている

これはマキシマムでも無理か…

ガンナーAを使うしかない

そう思ったときにはからはから念話がきた

『照井さん、少し離れててください!』

どういうことだ?

『あれを封印できるのか?』

『やります!』

『…分かった』

俺はそこから離れる

すると木を目掛けて砲撃?が伸びてくる

そしてそのまま木のジュエルシードを封印した

…魔法とは俺が考えてるよりも凄いのかな
やはり専門には敵わん

なのはが飛んで来る
そのまま俺の横に降りる

「あれに気づいていたのか」

「…はい」

なのははジュエルシードを持った奴を見たが気のせいだと思い、見
逃した

その結果がこれだ

これだけの被害では死者は居ないだろうが怪我人は居る筈だ

「それで如何したいんだ？」

自分の所為だと思ふのならそこから如何するかだ

「私は…」

こういうのは苦手なんだがな…
左なら如何にかするのかもしれないが

『ユーノ、後は任せた』

『え、任せたって？』

ユーノに後を任せて俺はその場から離れる
一度考えてみるべきだろう
自分が手伝うものの重大さとかな

俺も油断してたのかもな
魔法などは考えていたよりも危険だった
これからもつと被害ができれば…

左に手伝ってもらう事も考えなければな

第六話（後書き）

アクセルの出番はありません

てか巨大な敵とかはリボルキャリアとか無いと戦えないよね

現在リボルキャリアは風都の探偵事務所にありますから

なのはは事の重大さって良く分かってなかった様な気がする

危険な物って言われて町が大変な事になるとかは思ったけど怪我人や死者についてよく考えてなかった感じが個人的にある

まあ、子供だからと思うけど

照井君も魔法について深く考えなかった感じで油断してました
今回で左君の活躍が増える事になるといいな…

第七話（前書き）

中々上手く書けない…
Wを早めに出すべきか…

第七話

「大体分かった、次からは俺もなるべく協力する。はやてはどうする？」

「少し大きい依頼が来たとも言っ」

俺は前回の事件からこれからは左の協力を頼むことにした
あれほどの大きさになるのだ

秘めた力は想像以上だった

あれはドーパント以上の危険性を持っている

一人では無理だと良く分かった

納得は出来んがなのはも前以上に戦闘に参加させることにする
あれほどの大きさの物が出た時はなのはの力は必要だ

「了解、そう言っくとく。発動したら知らせてくれよ」

「ああ、分かった」

「で、なのはちゃんは如何したんだ？」

説明は必要だと思っけど」

「ああ、なのはは友達と遊ぶ約束があるらしい」

「まあ、魔法少女でも小学生だしな。友達とも遊ぶか」

そう

いくら魔法が使えるからといっても小学生だ

危険なこととはなるべく控えるべきだ
だがなのはも強情だしな
あれを説得するのは難しい

そう言えばあの後ユーノは上手く慰めたのだろうか？
大丈夫だとは思うが…

「なあ照井、俺達は魔法は使えないのか？」

「俺は使えん、魔力はあるが魔法が全然使えんのだ」

「そっか。使ってみたいなあ魔法…」

目をキラキラさせながらそんな事を呟く左は子供らしいと思う
いや、俺が子供らしくないのか？

精神年齢はもう三十歳は過ぎているんだがな俺達は…

そんな事を考えてるといつもの発動の気配を感じた

「左、行くぞ！」

すぐさま外にでてバイクに乗る

年齢など細かいことを気にする暇は無い

ユーノと連絡を取り場所を教えてもらう

そこはなのはが遊びに行っている友達の家のすぐ近くだという

急がなければまた被害がでる！

「おい！、待てよ照井！」

左もバイクに乗り後を追ってくる

場所は月村の家の近くだった
月村に友達がいるのかよなのはちゃんは
すげーぜ

なんて考えてる暇は無かったんだな
けどこれ如何するんだ？

「おい照井、どうする……って何してんだ馬鹿！？」
あろう事かあの馬鹿は不法侵入した
おいおい、ばれたらやべーぞ…

「クソッ！、あとで絶対殴るぞコノヤロー！！！」

そう言つて俺も不法侵入する
こつなりや行くしかねえだろ！

俺は魔力を感じた場所に行くとなのはを見つけたが

「ッ！、なのは！」

砲撃が当たり、落ちていくなのはと別の金髪の少女
あいつは魔法使いか！

『ACCEL！』

「変…身！」

アクセルに変身し、ブレードで斬りかかる

「なっ！？」

俺の変身を見て驚く相手
隙だらけだ！

「はあっ！」

「くっ！」

跳びあがりブレードを振るうが避けられる

「なのはは無事か」

「照井さん！」

どうやらユーノがなのはを助けたらしい
気絶してるようだな

「あいつの相手は俺がする、なのはを頼む」

「あつ、照井さん！」

答えを聞く前に駆け出す

相手は空へと逃げようとする

ならば！

『ENGINE！』

エンジンのメモリをブレードにセットする

『J E T!』

切っ先を相手に向け、トリガーを引く
先端からエネルギー弾が飛んでいく

「魔法じゃないっ!？」

驚きの声を上げながらも全て避けきる
中々やるようだ

「なら…」

相手は咄くと別な方に向かって飛ぶ
逃げたと思ったがそちらを向いた瞬間しまったと思った

大きな猫がいる

おそらくジュエルシードに憑依されたやつだ
間に合わないと思いながらも走る
その時…

「こっから先へは行かせないぜ…」

「あいつ何処行った？」

こんな森の中じゃ探しにくいんだけどな
ちなみにいつでも戦えるようにとドライバーは装着してある
何かあってからじゃ遅いかもしれないし
そんな事を考えてると向こう側から大きな音が聞こえてくる

「あつちか！」

走って向かうとそこには金髪の鎌を持った少女とアクセル——照井
——がいる

照井と戦ってるのか

だったら今のうちにジュエルシードをとればいいんじゃないか
辺りを見渡すけど、大きな猫しか見当たらない…

「ん？」

なんか変なの無かったか？
大きな猫がいる……

「なんだこいつ!？」

こいつか!?

でもどうやって取り出すんだよ?

取り出し方なんて俺分かんないし…

照井に頼むしかないよな

あつちは…終わりそうか?

鎌を持った女の子が照井を無視してこっちに向かってくる
戦うよりもこっちの回収を優先したのか
しっかりした判断だな

でもこっちには気づいてねーしな
いいタイミングだ

「こっから先へは行かせないぜ…」

そう言つて正面に立つ

「っ!?!」

女の子は驚いて止まってしまう

その隙にメモリを取り出しドライバーへ差し込む

「変身!」

『JOKER!』

変身して右手を軽く振る

「さあ…いくぜ」

「あの人と同じ！」

空に飛べると厄介なのは分かっているからその前に一撃でも入れればいい

一気に走り出し相手に迫る

「くっ！」

相手も下がりがりながら飛ぼうとするが…

「お前の負けだな」

「え？、ッ！？」

驚きの声を上げながらも下がった相手は後ろから攻撃を受け、地面に倒れる

「その通り、俺が居ることを忘れていたな」

「よく分かったな照井」

「お前の考えなど大体分かる」

俺が走り出した瞬間には相手が下がってから飛ぶことは分かっている
空中の敵に対して今の状態の俺達には有効な攻撃手段が無い事など
分かっているはずだ

だから下がる瞬間を狙って照井が攻撃を後ろから当てる事が出来た

しかしまあこんなに上手くいくとは考えてなかったが

「お前の負けだ。色々話、聞かせてもらっぜ？」

「くっ…」

そう言って相手に近づいて行った時、突然光が溢れる

「なっ！？」

魔法かと思って防ごうとするが衝撃は来ない
攻撃じゃないのか？

光が収まって見て見ると女の子は消えていた

「逃げられたか…」

まあ取られなかったし良かったんじゃねーか
でもこれからの戦いにはあの子と戦うようだろう

飛ばれると俺達には攻撃手段が無くなる

リボルキヤリーでも使うか？

でも照井ならともかく俺が飛ばたとしても攻撃手段が格闘だけだしな
あれ、俺ってもしかして使えない？

「如何した左？、急に泣き出して？」

「うるせえ！、俺だってもう一人が見つかれば戦えるんだよ！」

「？」

でも確かに早く見つけるようだ

このままじゃアクセルだけでは勝てない敵なんかも出てくる
そうなった場合俺が居たとしてもあまり変わらないだろう

俺の力はアクセルよりも弱い

Wがどれほどの力なのかは分からないが少なくともアクセルと同等
だろう

「ホント、何処に居るんだよ…」

第七話（後書き）

この作品のライダーの強さは微妙です

確かに強いのですが飛べなかったりしますし、Aランク位の攻撃からまともに効きます

あれ？、最強でもないなこれと思ったりする

自分の中では最強なのに…

ですがエクストリームなんかになれば効かなかったりするかも
てかなのはとフェイトが戦えば、ライダーはいらなかったりする

……トーパー戦とかの方がやり易いね

第八話（前書き）

結構掛かりました

受験生なんで忙しかった…

その所為かなり強引になっちまったよ…

第八話

あれから女の子には会っていない

だけどこれからは女の子との奪い合いになるだろう

魔導師の空中戦には俺達では対応できない

なのでなのはちゃんに殆ど任せることになるだろう

だけど相手も相当強い

なのはちゃんが勝てるかどうかが問題だ

あの後のはちゃんが目を覚ましてから女の子に逃げられた事を説明した

当然俺についても説明しておいた

なのはちゃんに女の子との戦いを任せる事を話したら最初からそのつもりだったらしい

絶対お話するそうだが…

で現在は照井がなぜかなのはちゃんに誘われて温泉に行っているのだ
ついでに俺も行くことになった

はやては検査入院つてやつだ

タイミング悪かったな

こんどは三人で行きたいと思うがな

それよりも今の問題は

「この気まずい感じを如何するべきか？」

とても気まずいのだ…

いや、なのはちゃんのお父さんとか超怖いです

ちよつと睨まれてるよ俺

何故俺が睨まれなくちゃならない…

そりゃ家族＋友達での旅行なのに見知らぬ人が来たら警戒するよな
取り合えず…

「俺の名前は左玲司。探偵をやっています」

自己紹介からやってみようと思う

「探偵？、君みたいな子が？」

「はい、俺の親みたいな人がやってたんですけど今は俺が代わりに
やっています」

「そうか、だけどその探偵が私達に何の用かな？」

「あなたの娘さんのなのはちゃんの依頼で」

「なのはが？」

あ、やべっ

理由とか考えてないぞ

あゝ

「はい、ですが両親には内緒にしておいてくれと頼まれているので
依頼内容は…」

「だけど君達に出来る事なのかな？」

「はい、依頼はちゃんとこなす。そして命懸けで依頼人を守ります」

命懸けで依頼人を守る

俺のポリシーみたいなものだ

これだけは絶対曲げる気は無い

「……」

「……」

駄目か…？

「…うん、君なら大丈夫だろう」

「へっ？」

「まあ取り合えず温泉に来たのだからしっかりと入るよね」

「あ、いや俺達は有事に備えて別に待機しているのであなた達はゆっくりと…」

「少しは休むべきだよ。さあ行こうか」

「え、いいですっ、遠慮しますっ！」

「いいから遠慮しないで」

笑いながら連れて行かれる

何故こうなった…

「何だか疲れた気がする……」

「気のせいじゃないか？」

いや、絶対気のせいじゃない
士郎さんに色々聞かれて誤魔化すのがどれだけ大変だったか
殆ど誤魔化せてないだろうけどな

「けど護衛なんて暇な仕事なんだよな」

実際事件などが起こる事など少ないのだからただ近くにいれば良いだけのが殆どだ

けど護衛を頼むのは偉い人とかだから結構事件が起きる

まあ、魔法とか無いだけマシなんだけど

あつたら余計に疲れる

「近くでジュエルシードが発動したりするかもな」

「ハハッ、そんなアニメみたいにでるわけ無いだろ」

照井の冗談を笑って流す

けど、嫌な雰囲気はある

俺達には魔法が使えないから魔導師と戦うには不利だ

負ける事はあまり無いだろうが勝ち負けがジュエルシードの獲得であれば勝てる可能性は低い

転移やバインドなどを使われると勝てないだろう

しかも俺の今の力はアクセルに劣っている

照井が負ければ勝てない事になる

Wに変身できればな…

『二人とも、ジュエルシードが発動した!』

おいおい、マジかよ…

「場所は何処だ! 直ぐ行く!」

「なんで行く所で発動すんだよ!」

俺達はジュエルシードが発動した場所に向かっている

だが違和感というか何というか
嫌な感じがする

ねつとりと絡みつくような感覚

「照井、分かるか？」

「いや、だが誰がいる…」

既にドライバーは着けている
メモリを取り出しておく

「誰だ！ 出て来い！」

そう叫ぶ

出て来れば良いんだが…

「おやおや、こんな所で会うとは。奇遇ですねえ」

嫌な声が聞こえる

「この声は…」

声の主が姿を現す

黒いスーツを着た男
コイツは！

「井坂！ 何故ここにいる！」

井坂孝治、風都で俺達と何度も戦った敵
この町にいるはず無いのに何故だ？

「私がここにいるのはこの町で何やら強い力を持つ魅力的な物があ
るらしいじゃありませんか。

私はそれを貰いに来たのですよ」

此方の考えを読んだ様に言う井坂

「ジュエルシードが目的なら渡すわけにはいかん！」

『ACCEL！』

「変…身！」

『ACCEL！』

照井はすぐさま変身し井坂に斬りかかる

「あなたが私に勝てますかね？」

『WEATHER！』

井坂がメモリを取り出す
俺達の使っているメモリよりも有機的なフォルム
それを自らの体に差し込む

白い体に陣羽織の様なものを羽織っている侍の様な姿
ウェザードーパントに姿を変える

「照井！」

『JOKER！』

「変身！」

俺も変身して加勢する
殴りかかるがあっさり回避される

「君では相手にならない…なっ！」

「グッ！？」

逆にカウンターを食らう
けどまだやれる！

「オラッ！」

「フッ…」

どれだけ攻撃しても回避されるかカウンターで攻撃されるかだ

「左！」

『ELECTRIC！』

エンジンブレードが電気を纏い斬りかかる

「危ないですね」

照井の方に手を向け雷撃を放つ

「ぐあっ！」

「所詮この程度ですか」

明らかに風都に居た頃よりも強くなっている…

ウエザーのメモリは天候の記憶をもったメモリだ
冷氣、竜巻、落雷など様々な現象を模した多彩な攻撃手段を持っている

その強さは通常のドーパントとは段違いに強い

せめて一撃入れば！

「うおおおおお！！！」

『JOKER！MAXIMUM DRIVE！』

「ん？」

「左！」

右手に全ての力を込める

「ライダーパンチ！はあ！」

「ぬう！？」

相手に当たり爆発する
煙で見えないが当たったはずだ
これで…

「甘いすねえ」

「なっ!？」

無傷だと？

確かに当たったはずじゃ…

「あれは屋気楼ですよ。貴方から始末してあげましょうか」

こちらに向けた手から竜巻が放たれる

「ぐっ!うわあああ!」

「ぐっ…くう」

俺は…

そうだ、井坂にやられて…

変身も解けてる

照井は？

向こう側ではまだ戦いが続いているらしい

音が聞こえてくる

それほど気絶してた訳じゃないのか

「照井を助けねえと…」

けど今のままじゃまた負ける

やっぱりWにならねえと…

「無理にでもやるしかねえな」

ロストドライバーを外してダブルドライバーを着ける

ダブルドライバーは意識の共有が出来たはず

相手は驚くかも知れないが無視する

『誰か…俺の声が聞こえるか？』

頼む…聞こえてくれよ…

『…誰だ…』

聞こえた！

『頼む、力を貸してくれ。お前の力が必要なんだ』

『…力？…無理だ、まだ私は…』

『頼むっ！、このままじゃあいつが…！』

早くしないと照井が…

『……………分かった』

『えっ？』

『お前が何者なのかは分かっている、仮面ライダーなものだ』

『何？…』

『だが変身できるかは分からん、私はまだ…』

『それでも！やるしかねえんだ…！』

やらなきゃ照井がやられる

そつしたらなのはちゃんもやられるかもしれない

だから…

「いくぞ…」

『…分かった』

メモリを取り出す

『CYCLONE!』

『JOKER!』

「「変身!」」

声が重なる

サイクロンのメモリが転送されてくる
相手の意識と共に

ジョーカメモリを差込み、左右に展開する

『CYCLONE! JOKER!』

今までと段違いの力が溢れてくる

それと一緒にもう一人の存在を感じ取る事ができる

緑、黒と左右非対称の色

首には銀色のマフラー…ウィンディスタビライザーが形成される

『変身できたな…』

「ああ、いくぜ」

『私がお前の動きに合わせる』

「頼む」

待ってるよ照井！

第八話（後書き）

オリキャラ井坂登場

これは原作の井坂と同じ様な人です

現時点ではまだ原作時ほどの強さではありません

原作の井坂は実験を繰り返して強くなったとの事でしたのでこの作品の井坂はまだそれほどの実験は行っていません

なので現在の強さにはライダー一人分よりちよつと強い位です

ジョーカー半分程度の強さで原作の左より経験が無いので弱体化しています

そして強引なWへの変身

相手は神様によって事前に知識はあったという事です
てか相手誰だか分かりそうだよね…

第九話（前書き）

やっと更新だ…

来月には受験で忙しいので今以上に更新が遅くなります

第九話

「グッ…はぁはぁ……」

「おや？まだ立てるのですか。なかなか耐えますね」

「く…そ……」

左が吹き飛ばされた後、俺は奴と戦い続けた

だが俺一人では今の奴には勝てず、一方的に攻撃され続けていた

「だが、限界のようですね…」

奴の言うとおりだ

立ち上がるのすら辛い

だが、ここで倒れれば井坂はジュエルシードを回収に行くだろう。

そうすればなのはちゃんが襲われる

井坂ならば平気で殺すだろう

それだけはさせない

「まだだ…」

「ほう、まだ戦うと？しかし時間も無いのでね。貴方はここで…」

奴が手を向ける

「消えてもらいましょう…ッ！」

「ハアッ！！！」

横から現れた者の攻撃によって妨げられる

「お前は…」

「照井、まだやられちゃいねえよな？」

照井はボロボロだった
間一髪だな

「お前は休んでろよ、アイツの相手は俺が…いや、俺達がやる」

井坂を見る

傷などは全く無い

「その姿は？」

『仮面ライダーWだ』

もう一人の声が答える

「W？新しい姿ですねえ。だが私の敵ではない」

「如何かな、今の俺達ならお前にも対抗できる」

W、複数のメモリを使い分けて戦うスタイル

ウェザーの複数の現象を発現させる能力に拮抗できるはずだ
単純に力なら負けるかもしれないがこちらの力は見せていない

「ほう、やれるのならやってみせてもらいましょうか」

ああ、見せてやる

俺達の力を

指を相手に向け言い放つ

『さあ、お前の罪を数えろ!』

駆け出し、拳を振るう

以前はジョーカーによる身体能力の強化だけだった

だがWはジョーカーの強化とサイクロンの風を司る力が合わさっている

それにより速さも上昇している

「フツ!ハアツ!」

「ぐうつ!?!この…っ!」

拳と足にも風を纏わせて攻撃する

これには奴にも効いている

「なめるなっ!」

「ッ!」

相手が冷気を放つ

咄嗟に防いだ右手が凍りつく

「フツ、フフフ…これでその手は使えない……」

一撃でも与えた事に笑い出す井坂
確かに凍りついた右手は使えない
だが…

「そいつはどうかかな?」

『変えるぞ』

サイクロンのメモリを抜き取り赤いメモリを取り出す

『H E A T!』

ドライバーに差込み展開する

『H E A T! J O K E R!』

Wの体の右側が緑から赤へと変わる

「何!？」

ヒートは熱き記憶のガイアメモリ
炎の力を使うことが出来る
それによって凍った右手を溶かす

『この程度の冷気は効かない』

「そう言う事だっ!」

右手に炎を纏わせて振るう

「オラァッ!!」

「ぐああっ!」

一撃で吹き飛ばす

「どどん行くぜ」

今度はジョーカーのメモリを抜き取り銀色のメモリを使う

『METAL!』

ジョーカーを抜き取り左側に差し込む

『HEAT! METAL!』

再びWの姿が変わる

赤と銀の姿、ヒートメタル

このフォームはWの中でも防御力と破壊力に優れたフォームだ
さらにメタル専用の武器であるメタルシャフトが使える

背中にマウントからメタルシャフトを取り、構える

「おのれ…っ！」

井坂も腰からウェザーマインを取り出す

「はあっ！」

伸縮自在のチェーンによる攻撃が来る
それをメタルシャフトで弾いていく

「まだまだ！」

それと同時に雷による攻撃もしてくる

これは流石にキツイな…

「ぐっ！くそっ…」

攻撃も捌ききれなくなってきた
どうする？

『一撃でも当てて怯ませる。ルナトリガーでいくぞ』

「了解！」

一旦後ろに下がる

ドライバーから両方のメモリを抜き取り新たにメモリを差し込む

『LUNA！TRIGGER！』

今度は青と黄色の姿に変わる

銃撃手の記憶のトリガーと幻想の記憶のルナをあわせたフォーム
ルナトリガーだ

胸部に装着されたトリガーマグナムを取り出し撃つ
弾は複雑な軌道を描いて井坂へと向かう

「何っ！ぐああっ！？」

打ち落とそうとした井坂だが複雑な軌道の弾には当たらず攻撃を受けた

ルナの幻想の力を受けたトリガーの弾は自由自在に変化する為、変則的であり正確な射撃が出来る

「これで決まりだ」

ドライバーからトリガーマモリを抜き去りトリガーマグナムに差し込む

『TEIGGER! MAXIMUM DRIVE!』

トリガーマグナムの銃身を変形させマキシмумモードに変える
相手に向け両手で銃を構える

『トリガーフルバースト!!』

そう叫び、撃つ

メモリの力を最大限増幅させたマキシмумドライブにより、通常よりも威力が遥かに高まった弾が井坂に迫る

「ぐあああああぁあつ!!」

井坂へと弾は命中し爆発を起こす

「…はあ…」

メモリを抜き去り変身を解く
そして地面に座る

疲れた…

「でも結局逃げられたな…」

井坂には逃げられた

爆発の後には人も居らずメモリを破壊した後も無かった
如何にかして攻撃を防いで逃げたのだろう

だがあれほどの攻撃を完全に防ぐのは無理だろうからダメージは与
えた筈だ

『しかしこれから如何するんだ？』

「確かに如何するか……？」

Wに変身出来た事は良い、だがこの町にジュエルシードを狙って井坂が現れた事は誤算だ

俺達はどうしても井坂を相手にする必要がある

これではなのはちゃんに戦わせてしまう

それに…

「お前もだよ」

『何？』

未だにドライバーをつけているから意識は繋がっている

「まずはお前の名前を教えてください」

『……』

ん？

「どうした？」

『……私に名前は無い……』

何だって？

「じゃあなんて呼べばいいんだよ？」

『何でも良い。好きなように呼べ』

「うーん……じゃあ相棒だな」

『相棒？』

そう、相棒だ

俺達は二人じゃないと変身できない
だからずっと一緒に戦う

「駄目か？」

『いや、好きなように呼べと言ったのは私だ。だが……』

「だが？」

『…悪魔と相乗りする勇氣があるのか？』

その言葉は何故か冗談に聞こえなかった

「っ！」

『………』

俺は……

「ああ、やってやるぜ」

『！』

向こうが驚いているのが伝わってくる

「俺は皆を守る為に戦ってた。その為なら悪魔とだって相乗りしてやる」

はやてやなのはちゃんに照井

風都のみんな

守りたいのはたくさんある

それを守りきるには強くならなきゃいけない
それに…

「お前が悪魔って言うのは信じれんねえしな」

『だが私は！』

「今は納得出来なくてもいいぜ。けどいつかは分からせてやるよ。
お前が悪魔じゃないって事をな」

自分でも何でこんな事言ってるのかわかんねえ

けどコイツは俺の事は心配してそんな事を言ってたんだと思う
だからコイツはそんなに悪い奴じゃないって事は分かる

『…』

返事は無いけど一応は大丈夫だと思う

「ま、これからよろしくな。相棒」

第九話（後書き）

相棒はそんなに悪い奴じゃないと思う
誰か分かる人いるかな…？

Wの戦闘描写は難しい
どのフォームを使うのか悩む

第十話（前書き）

今回は短いです

理由は勉強とオーズの映画を見てきたからです

全然進まないな…

突然だけど劇場版とか書いて見ようかななんて思っただけですけどどうでしょう？

見てみたいのなら感想に書いてください

多ければ書いて見ようと思います

コアか運命のガイアメモリ、どちらかです

書き終わるのは遙か先になりますけどね…

まだ無印終わってないんで

第十話

あれからすっかり照井の事を忘れていて気絶してたのを拾ってきたのはちゃんはある女の子に負けてしまったらしい

その時にジュエルシードが暴走してそれを無理して止めた女の子は怪我をしたらしい

けどそのまま逃げられたという事だ

それで俺達は井坂がまたジュエルシードを狙ってくるはずだから相手をしようだ

そしたらなのはちゃんを戦わせる事になってしまっ

「どうしたらいいんだよ…」

ホント嫌になる

これも全部井坂って奴の仕業なんだ…

『やはり魔導師の相手はある少女に任せるべきではないか？』

「でもな、小学生だぜ？」

流石にあれくらいの年で戦わせるのは出来ないけど他に当てが無いのも事実だし

あ、今俺はドライバーを着けて相棒と相談中だ
照井に依頼とかはやての世話とかを任せている

『だが私達でしか奴の相手は出来ない』

「そうだけど…」

あんな子に戦わせるのは抵抗がある

俺達は精神的に大人だったけどあの子はまだ子供だ

『それにあの魔導師を救うのはあの子の方が適役だ』

「確かにな」

どうもあの魔導師の女の子は何かありそうだし
自分で何かするっていう子には見えなかったし

「仕方ないな、なのはちゃんのサポートは照井にやってもらったか」

俺達は井坂を直接探す

照井はなのはちゃんと一緒に行動してジュエルシードを狙ってくる
井坂を相手にする

どちらかが見つけたら連絡して合流
一気に叩く作戦だな

「おし、じゃ行ってくるか」

『ああ』

まあ、なんだ

あの後照井に俺達で考えた事を話してこれからはなのはちゃんと共
に行動ことになった

その代わりにはやての世話は全て俺任せになったが…

「玲にいいまだ？」

「まだだよ、急かすな」

『遅いな…』

現在料理を作ってるんだ

実際家事なんかははやてが出来る
照井も色々出来るから手伝ったりしている

なのに俺意味あるのか？なんて思ったので料理を作ってやることに
したんだ

何故相棒の声が聞こえるのかはドライバーを着けてるからだ
いや確かに普通に着けてたら変だけど上手く誤魔化してんだよ
ばれて無いんだぜこれ

『無駄にすごいな』

『無駄にとか言うな！』

そんな感じで料理が完成

「どーよ？」

「これは意外やった！玲にいがこんなに出来るなんて」

『確かに意外だ』

「お前ら何気に失礼だな！」

まあ驚くのも無理は無い

見た目は高級料理な感じだしな
和洋中なんでも作れる

何でこんなに出来るかっていうと昔とある料理人の下で修行した成
果だ

あの人は素晴らしかった

「その料理人は何て言うん？」

「ああ、天の道を往き総てを司る男って言ってたぜ」

「誰やねん…」

「今は豆腐を買いに行っている」

とりあえず食ってみろよ

「……美味しい」

「当然だな」

『興味深いな…』

『ん？どうした相棒』

『いや、何でもない』

『そうか？』

でもまあはやてに美味いって言われたのは嬉しい
コイツも料理作るの上手いし

「バカな玲にいに料理で負けるなんて…」

「バカっていうな！」

ショックを受けてたがすっかり完食した

第十話（後書き）

短いですが、はい

ちなみにこの世界では平成ライダー全員が居ます

しかも左君は皆と知り合いです

時々出すかもしれませんが

第十一話（前書き）

全然進まない所に今回はドーパント相手の話
遅いぜ…

第十一話

「最近変な事件が多いな」

「どんな事件なん？」

「十八歳位の学生が何人も死亡している事件、死因は毒らしい。体内出血やなんかで効果がバラバラだけどな。けど何人かは噛まれた様な後が残っているから蛇かもしれないって言う話だ」

「へー、けどこの辺りに蛇なんて居るんか？」

「いや、居ないはずだけど」

「そっか」

「は yet はあまり興味が無いらしいな。けど、俺は何か怪しいと感じている」

「毒による死亡、明らかに誰かが殺したのかも知れないが何人かが噛まれた痕があり蛇かもしれない」

「もしかしたらドーパーントかもしれない」

「ドーパーントなら蛇の記憶か毒の記憶のメモリを使っただけ手引きしたのは井坂だろう」
「だが犯人の目的も分からない」

「まあ、調べて見るか」

「取り合えず被害者とその周りからだな」

照井はなのはちゃんと一緒にジュエルシードの搜索だ

『で、何か分かったのか？』

「まあ、多少な。狙われたのは全員ある学校の生徒っていう事。けど学年も性別もバラバラ」

次誰が狙われるかも分からない。未然に防ぐことは出来そうにも無い

「かと言って襲われるのを待つのも駄目だし…」

『私なら如何にか出来るかもしれん』

「は？」

『どうした？』

「いや、出来るのか？」

『ああ、もしかしたらな。だがそれにはもっと情報が必要だぞ』

「それは頑張るさ。けどどうやって？」

『私の能力でだ』

「能力？魔法か」

『いや違う。地球の本棚ほしのほんだなというものだ。簡単に説明すれば地球の全ての情報があるが使うにはキーワードによる検索を掛けなければ情報を確定できない』

「なっ！？すごいじゃないか。それがあれば…」

『ああ、犯人を特定できる』

「よし、じゃあ早速情報集めに行く…」

「うわあああああ！」

悲鳴が聞こえた、しかも場所は結構近い

「いきなり犯人かもな！」

すぐさま走り出す

声の聞こえた場所に行くのと倒れている人とその場から去ろうとしている異形…恐らくドーパントが居た

「待ちやがれ！」

俺の声に気づいた相手は逃げようとはしない
どうやら目撃者は消すらしいが…

「相手が悪かったな」

メモリを取り出す

「何！？なんでお前がそれを！？」

どうやらメモリを持っているのは自分だけと勘違いしたらしいな

「まあ、残念だったな」

『JOKER！』

『変身！』

『CYCLONE！JOKER！』

サイクロンジョーカー、Wのフォームの中でも平均的な能力であり、
様子見なんかの為に最初は基本的にこのフォームだ

「いくぜ」

「この！」

相手が襲い掛かってくるが素人だ
フェイントなど無くただ殴りかかってくるだけ
カウンターで殴り、蹴る

「何なんだよアンタは！」

「仮面ライダーだ」

知らないと思うけどな

「オラッ！」

かなり力を込めて殴り飛ばす

「がッ！？」

「さあ、お終いだぜ」

倒れている隙にメモリブレイクをしようとするが…

「馬鹿がつ！」

相手は腕から煙を出す
直ぐに煙は辺りを覆いつくす
逃げる気か！

サイクロンの風の力で煙を吹き飛ばすが相手の姿は見えない

「逃げられたか…」

変身を解除する

辺りに煙が残っているが気にならない位だ

「そうだ、襲われた人は」

倒れていた人を思い出し駆け寄ろうとするが、ふらつく

「あれ？」

『どうした？』

「いや、別に」

なんとも無いと言いたかったが言う事が出来ずに倒れた

『左？』

あの煙、毒かよ

そう思い、俺は意識を失った

第十一話（後書き）

毒とか詳しい事は分かりませんので変な所は教えて下さるか笑って見逃してくださいw

事件みたいにしてみたが全然上手く表現出来ないな…
これから改善していきたいと思います

第十二話（前書き）

ありえないほど進みが遅い

第十二話

あの後俺は倒れている所を発見されて病院行き。けど俺は大したことなく少しの検査で終わり退院した

その間も事件は続いて段々と無差別に襲う様になって来た

けど襲われているのは同じ学校の生徒だけなので犯人の目的はその学校にある筈

まあ、休んでる暇は無いわけだ

早速得た情報を元に相棒に地球の本棚で検索してもらったがとても便利だという事が分かった

分かった事は最初に襲われていた生徒は皆不良の様な生徒だったらしい。これは俺も学校の生徒達に聞いて確認した

となると犯人はその不良に対して恨みのある生徒となる

けどその生徒はすぐに見つかった

「お前が須藤幸也でいいか？」

「はい、そうですけど…何か？」

第一印象は暗い感じだな。でもって何だか諦めている様な感じもする結構カッコいい感じなんだが雰囲気が残念な感じだな

「探偵の左玲司だ。今この学校の生徒が襲われている事件について調べていてな

お前、最近襲われてる生徒にイジメとかされてなかったか？」

「ああ、はい。イジメを受けてましたけど」

「そっか」

何だかおかしい。イジメを受けてるかって聞いてあっさり認めるか？

「そいつらの襲われた事に心当たりは？」

「ありません。けど良いんじゃないですか？あいつ等散々悪い事やつてきてたんだから」

嫌な顔して言うなあ。そう思う位酷いイジメを受けたんだろっかなさて、如何するか

犯人の可能性はありだけど…

「幸也君、何してるの？」

「あ、佐藤さん…」

ん？

知り合いか？

「えっと、その人は？」

「ああ、左玲司さん。探偵あの事件の事調べてるんだって」

「そっか。私は幸也君のクラスメイトで佐藤良美って言います」

「探偵の左玲司。今回の事件で知っている事とかあるか？」

「いえ、特には何も…」

「ん、分かった。邪魔して悪かったな。けどお前はもしかしたら逆恨みとかで襲われるかもしれないからその時は俺に連絡してくれや。助けに行くからさ」

連絡用に電話番号を教えてから二人と別れた

取り合えず照井にも連絡だな。犯人は大体分かったってな
予想どおりなら速くて今日か明日にでも終わらせられるかもしれない

「……なんつーか、速かったな」

「ああ、だが此方としては嬉しい事だ」

「…まあな」

俺達が居る場所は町の廃工場だ
そこには俺達他に数人の人影がある。恐らく学生だろう

須藤幸也と不良達だな…

「テメエが今やってる事件の犯人なんだろ」

「もう止めてくれると嬉しいんだけどさあ？」

自分達が今までイジメてた奴が無事で不良だけやられてるんだし、犯人はイジメてた奴だと思ふよな

「違うよ、俺はやってない」

しかし、須藤はこんな状況でも落ち着いてんなあ慣れたのか諦めたのか。多分諦めたんだろうな

「ふざけてんじゃねえぞ！」

落ち着いた態度で居る須藤に我慢出来なくなった奴が殴る

…… まだだ、まだ我慢だ

「調子乗ってるよと殺すぞ！」

そんな事を叫びながらナイフを取り出す来るか…

そう思った時、不良の一人が突然倒れる驚いているもう一人もすぐに倒れた

「行くぞ照井、相棒」

「ああ」

『気をつけるよ』

俺達は走り出して須藤と不良達の傍に行く

「大丈夫か須藤？」

「あつ…探偵の」

「こいつ等連れて逃げる。いいな？」

「は、はい」

俺の真剣な様子に驚いた須藤は慌てて二人を引きずりながら逃げた

「さあて、出て来いよ。佐藤良美」

そう言つと物陰から出てくる佐藤良美

「……いつ気づいたんですか」

「最初は俺も須藤幸也が犯人だと思つたさ。けど須藤の後に着たお前は俺をみて一瞬だが驚いた」

「……」

「それに須藤幸也は諦めてはいたが普通だった。けどお前は違う。襲っている内に傷つけるのが楽しくなってきたんだろ？最近は無差別に襲つてたりもするよな」

「…最初は彼を助ける為だった。彼は何もしてないのにいつも傷つくから。」

彼の代わりにあいつ等を襲った。けどそしたら今度は彼が犯人だと疑われた。

疑った奴も襲った、全部彼の為なんだよ」

彼女はそう言って笑っている。歪な笑顔で…

ガイアメモリの使い過ぎによって精神が侵されたんだろう

こんな奴は何人も見てきた

だからこそ止めてやると決めた

悪意で使うんじゃないくて誰かを救う為に使う奴も居る

けど最後はガイアメモリの所為で歪んでしまう

そんな奴を助けたいと思うし、こんな風にさせるガイアメモリ――

――それを作るミュージアムを倒す

「左、行くぞ」

『ACCEL!』

「ああ」

『JOKER!』

「変…身!」

『変身!』

『ACCEL!』

『CYCLONE! JOKER!』

音楽が鳴り響き体が変わる
相手を指差し、告げる

『さあ、お前の罪を数えろ！』

「振り切るぜ」

すぐに倒す！

「邪魔しないで」

『POISON』

彼女はガイアメモリを差込み、ポイズンドーパントに姿を変える
やっぱり毒か！

「はっ！」

相手は腕から毒液を放ち攻撃をしてくるが、それを避けながら相手に迫る
避けきれないのを腕で受け止めたが腕に焼けるような痛みを感じて止まってしまう

「ッ！？この毒強い！」

弾幕の様に放たれる毒液を壁を盾にして防御する

「照井は無事か？」

「いや、何発か食らった」

そう言う照井の体は毒液によって鎧が溶けている様な所もあった

「そんな所に隠れたって無駄だよ」

相手も此方に攻撃しながら近づいてくる

「クソッ！流石にあれじゃ近づくのは危険だぜ」

『トリガーのマキシマムで攻撃する。怯んだ所に照井涼が攻撃すればいい』

「よし。なら最初に俺が引き付ける、しっかり当てるよ」

「だったら一撃で決めないとな。ヒートでいくぞ」

「HEAT！ TRIGGER！」

ヒートトリガーは最も攻撃力に特化した姿だがメモリの力が強すぎて危険もある

まあ、暴走とかは無いけどな

「ふっ！」

照井が先に飛び出して相手を引き付ける

相手は狙い通り照井だけを狙って攻撃している

『サポートする。外すなよ』

「当たり前だ！」

照井は俺の居る場所から反対側まで移動している
相手は背中を向けている状態だ

トリガーマグナムにメモリを差し込んでマキシマムモードにする

『TRIGGER！ MAXIMUM DRIVE！』

飛び出してマグナムを構える

相手は気づいて此方に攻撃しようとするが遅い

『トリガーエクспロージョン！！』

「なっ！があっ！？」

銃口から熱光線が放たれる

それは攻撃しようとしていたポイズンドーパントに当たり怯ませる

『ACCEL！ MAXIMUM DRIVE！』

「はあっ！！！」

「きゃあああああああ！？」

すぐさま照井もマキシマムで追撃する

マキシマムを二回も決め、耐え切れずに爆発する

佐藤良美は気絶しメモリも体外に排出されて碎け散った

「はあ、照井はすぐに病院に連絡してくれ。俺は彼女を運ぶ」

「分かった」

お互い変身を解く

これで事件は解決するだろうな

ポイズンのメモリによって受けた毒はメモリを壊したら徐々に回復していつてゐるらしい

今回の事件は最近良くあるイジメが原因の事件だった

事件の犯人がイジメを受けていた奴じゃなくてそいつの友達だったけどな

彼女は須藤幸也に好意があったらしい。だけど学校でアイツと一緒に

に居るのは良くないと思われるからと彼女の友達は言っていた
がそれを気にせずに居た

それが不良達は気に入らなかったらしく須藤をより傷つけた
彼女はそれが許せずにガイアメモリを使って不良達を襲ったって言
う話だ

「犯人は彼女という事にはならなかったけどな」

『何故だ？』

「この町にはガイアメモリで起きた事件なんて取り扱ってないんだ
よ。だからそういうのを広めないようにする為に今回は学校の食堂
に毒がある食材を間違って使ったとかの事にするらしい」

『…意味は分かるがそれでいいのか？』

「良くないけどそういう事にしとけて事だろ」

このまま井坂を放っていればまたガイアメモリによる被害者が増える
すぐに見つけてぶっ飛ばさないとな

ジュエルシードとかもあるし、ホントに忙しいぜ

『しかしお前は…』

「ん？」

『…まあいい。それよりもあ…妹の事をしっかり助けてやれ』

「？、まあ今は最優先で守らなきゃいけないしな。大丈夫、しっか

り守るぞ」

『ならいい』

「コイツ、やけにはやての事気にするよな

」玲にい、ちょっと手伝って」

「おう。今行く」

言われなくても家族は絶対に守るけどな

第十二話（後書き）

今回の事件は少し失敗だったかもしれない

悪意で使う人がいれば誰かを守る為とかに使う人もいるかもしれない
いと思いました

実際には居ないかも知れないけどね

そんな気持ちで使ったのに結局はメモリによって精神が歪んでしま
います

左君はそれを無くしたいと思い、ミュージアムを倒そうとしています
照井君も大体一緒です

そして海鳴にはガイアメモリの事件を扱う警察機関などは存在しな
いのでガイアメモリを一般に広めない為に事件の内容を違うものに
した設定です

それにしても全然物語が進まない…

次回は行き成り時間が飛ぶかも…？

感想など書いてくれると嬉しいです

第十三話（前書き）

何故か劇場版の話を思いついた
暇を見つけて少しづつ書いてみようと思った

第十三話

「そういえばまったく照井の方の状況が分からないんだが…」

『…何だと?』

今更ながらに思い出したがジュエルシードの件はどうなっているのか俺は知らない

そっちは殆ど照井任せだからな

今の時間は遅いけど電話してみるか

「まあこの時間でも探してる筈だしな」

そう思つて電話をしようとするが突然何かを感じる

「魔力か?」

『そうだな、かなり広範囲に影響させてるようだが』

「それってどうなるんだ?」

『一般人に気づかれる可能性がある』

「不味いじゃねえか!」

何とかしようとするが俺には如何する事も出来ないんだよな
けどすぐに町の雰囲気が変わる

『結界だ』

「なのはちゃんか！場所分かるか？」

『大体はな』

「案内してくれ！」

急いでなのはちゃんの元へ向かう

もしかしたらまた井坂が来るかもしれないし、またジュエルシードを狙ってなのはちゃんを襲われたら不味い

「あそこか」

走ってなのはちゃんが居るらしい場所まで来ると段々と光が見えてくる

けど道の先に人影が見えた

照井かと思っただがその姿はスーツを着ている

「お久しぶりです、探偵君」

「井坂！」

井坂が笑みを浮かべて話しかけてくる

「この前の事件は随分対応が早かったですね」

「やっぱりテメエの仕業か」

「ええ、この町でも実験が続いていますのでね。成果はあまりよろしくないですが」

「町を泣かせる奴は許さねえ。テメエはここで倒す」

『JOKER！』

「相棒」

『ああ』

ドライバーにメモリが転送され、井坂もメモリを取り出す

『WEATHER！』

『変身！』

『CYCLONE！JOKER！』

お互い同時に変わる
俺は相手を指差す

「さあ、お前の罪を数えろ！」

言い放ち駆け出す。奴は雷を放つが構わず進んでいくが何発か当たっているがそれでも止まらない
一気に近づいて接近戦に持ち込む
能力を発動させずに押し切る！

「うおおおお！」

「馬鹿が！」

俺の所にだけ雨が降り出し、その雨の勢いに思わず立ち止まってしまう

その隙をウェザードーパントの武器であるウェザーマインのチェーンによって拘束される。

『玲司、ヒートメタルのパワーなら！』

「ああ、分かった！」

メモリを抜き去り、新たに二つのメモリをドライバーに差し込もうとするが…

「させませんよっ！」

「ぐあっ！？」

電撃を放ち俺の動きを止めてくる

怯んだ時にメモリも落としてしまった

奴は俺の落としたメモリを拾い上げる

「私達の使っているメモリとは大分違いますねえ。此方のメモリはUSBメモリに近い。園咲家の持つドライバーに入れる事を前提としたメモリがこの形状に近かったですねえ。しかし園咲家でも未だに開発されていないドライバーとガイアメモリを何故貴方達は所持しているんでしょうか？」

「クソッ、誰が答えるかよ」

内心は驚いていた。まさか人目見ただけで俺達の使っているガイアメモリの特性を理解するなんて思わなかった。園咲でも開発されていないのは分からない。恐らくその内開発されるだろうがその時は敵として戦う事になるだろう…

「そうですか、ならばジュエルシードの様な危険な物に手を出すよりもこのメモリを研究する方が遥かに有意義でしょう。これは貰っていきますよ。」

そう言いながら冷気を放ち、俺の体は凍り付いて動けなくなってしまう

『メモリを取られる訳にはいかないぞ！』

「分かってる！」

必死であり凍っていない手を動かしてメモリを変える

ヒートが取られているから凍った体を溶かせないし、威力の高い攻

撃が出来ない

一撃でも当てて怯ませられれば！

『CYCLONE！ TRIGGER！』

ガイアウイスパーが響き渡り、相手が此方に気づくけどこっちの方が速い

「ふっ！」

サイクロンによって連射性が高まったトリガーマグナムでメモリを持つ腕を狙って撃つ

それは狙い通りに腕に当たりメモリが此方に向かって弾かれる

「ぐっ！？しまった！」

此方に飛んできたメモリを掴みすぐさまドライバーに差し込む

『HEAT！ METAL！』

体が赤と銀色に変わる。ヒートの熱によって凍っていた体が解かされる

「散々やってくれやがって。今度はこっちの番だぜ」

「くっ、舐めるな！」

背中 of メタルシャフトを抜き去る。奴は電撃を放ち攻撃してくるがメタルシャフトで弾きながら近づく

自分の攻撃が効かず歩いてくる俺の姿に恐れたのか少しずつ後退

りしている

そうして遂に此方の間合いまで近づいた
俺はメモリをメタルシャフトに差し込む

『METAL! MAXIMUM DRIVE!』

『メタルブランディング!!』

メタルシャフトの両端から炎がジェット噴射の様に噴出す
その勢いで加速させたメタルシャフトを叩き込む!

「ぐああああ!?!」

吹き飛ばしたウェザードーパントはビルに突っ込み見えなくなった
マキシマムドライブをともに受けたんだ、無事ではすまない
この戦いでもう出てくる事は無いだろう

「照井の援護に行かなくちゃな…」

『ああ、だが大丈夫なのか?』

「大丈夫って言いてえけど無理っぽいな…」

相棒に答えてから変身を解きその場に倒れる
正直に言えばさっきの戦いで攻撃を弾いたり受けたりしても効いて
ないようだったけど実際は意地で立ってただけ
もう限界なんて超えてんだ

「照井ならしつかりやるさ、少し休む」

そう言って目を閉じる。

第十三話（後書き）

今回は左くと井坂の戦いです

次回が照井くん&なのはちゃん対フエイトちゃんになる予定です
次回の更新は2月中にはしたいなあと思います

お知らせ

長い間更新できずにすみませんでした。

理由は今回の震災が大きいです。

あとは震災の影響でモチベーションが下がったこととストーリーの内容が全然分からなくなってしまったせいです。

津波の影響で電気、水道などが通らず生活が苦しい事で執筆が進みませんでした。

執筆しようと思ってもなかなか思い浮かばず、その為に改訂版として新しく書くこうと思いました。

この作品よりも良い作品にしようと思えます！

こんな感じで止めてしまいますがよろしければ改訂版を読んでいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3538o/>

海鳴に吹く風

2011年10月8日01時27分発行